

都市空間と記号



I

古い話で恐縮だが、学生だったころ「黒メガネ」を買ったことがある。子供のころからの憧れで（なにしろぼくは、日活のタフガイ路線の神話のなかで生きてきたモンダイ・ガイであったので）、一度は劇場以外のところで変身してみたかったのだ。

しかしこれをかけて当時の神田の町を歩いてみると、妙におどおどした気分になった。自分がこれをつけたらさぞカッコイイだろうという最初の想いとは裏腹に、ぼくはすっかり不安におちいってしまった。

たとえば「自分が今むこうから来た人とぶつかったらなんと思われるだろう、いきなり殴られはすまいか」といった気持ち。そしてなにか人からじっと見られているような嫌な感じ。これがスクリーンであれば、ぶつかって殴るのは黒メガネの方だし、彼はいつも堂々と、肩で風きって歩いている。それなのにぼくの黒メガネを通して見えるむこう側の世界は変によそよそしく、自分がその世界からはずれた裸の観察者、無害なくせに無防備な人間のように、こころもとなく思われた。

その後これと同じ気持ちを二度経験した。

一度は留学して初めてルーヴェンの町につき（それは1969年の夏の終りで、これもずいぶん古い昔のこととなったが）、見なれぬ街をあちこち歩きまわった時のことである。この時ぼくはやはり不安で、むこうから来る人達の視線がこわかった。文部省や大学の事務局は大変好意的で別にこまったことはなかったのだが、ただ一歩宿や事務所を出て街を歩く時はこの不安がつきまとった。

最初ぼくこれを人種や文化の違い（つまりぼくが黄色、と言うより渋紙色の顔つきで、四角い顔に眼鏡をかけた日本人であること）に由来することだと簡単に考えてい

た。事実また街角で日本人やそうでなくても東洋人に会うとほっとしたことがある。そして数少ない日本人留学生とは急速に親しくなり、三日にあげず行き来した。

しかし今は、この時の不安をもう少し違った問題であると考えている。それは主に第二の経験をした為である。ぼくとその家族は三年半ほどベルギー生活をつづけた後、はじめ



て帰国した。そして時差の関係もあって二日ばかり自宅で休んだあと外に出て、また異和感を味わった。

別に自分が特別に良くも悪くもない人間で、皆と同じ顔つき体つきをしているのにやはり落ち着かなかった。デパートにズボンを買に行っても店員とうまく話が出来ずに結局お金を渡して店員にその値段で品物を選んでもらったりした。(今ならすぐにバーゲンのコーナーにゆくケチなぼくにして、なんと異常な行動だろう。) 心理的にはありきたりの対人恐怖かもしれないが、とにかくぼくの生理が日本の社会に簡単に適応することを拒んだのである。

この経験はしかしあまり長く続かず、しかも一度かぎりのものであった。その後家族を日本において一人暮らしをしたこともあって、何度か日本とベルギーの間を行き来したが、二度とこうした不安におちいることもなく、黒眼鏡のような異邦人の目をもって町を見ることもなかった。ぼくは、平気で新宿の人ごみのなかを歩き、雑踏のなかでかつてのような安心感を見出した。自分が誰でもなく、しかも群衆の一構成要素であることの安らぎ。「群衆のなかの孤独」だなんてとんでもない。

さてこのように、それぞれ二、三年の間隔をおきながら三つの経験をして(黒メガネをかけること、外国の町を訪れること、外国から帰ってくること)、ぼくは二つのことに気がついた。三つの経験だから三つ答があればよいのだが二つしかない。

その第一は、黒メガネをかけたぼくはあの時どうして不安だったのかという事の反省から始まる。この不安は(これまで何度も指摘されて来たことであろうが、あらためてもう一度)ぼくたちの慣れ親しんだ社会とその構造とに関係がある。

ぼくたちは日頃ある一定の構造(共時的な意味の対立に支配された世界)のなかに位置を占めて安心している。たとえば身分証明書の示すような地位を持ち、住所、氏名、年齢があり、通勤通学路や幾つかの町を含む大まかな地図と一定の生活時間割のなかで生き、日本語を話し日本語で物を考える。この構造のなかにいるかぎりぼくたちは、自分が誰であるか、自分がどんな役割を果すかを知っており、それに対して不安を感じていない。

その上、この構造はかなり強固で、よほどのことがないと変わらない。(だから、ぼくたちはカフカを読んでも、わりと平気で眠れるのだが、)ぼくたちは一般にこの構造に迎合し、積極的に同化する。もちろんそれはかなり窮屈だから、たまにはそこから抜け出したいくなるが、かなり急進的な構造破壊論者だってこの構造のうちに生きている。また自分が二重、三重の生活を送っており、生活にふりまわされて、自分が自分でないような気がするという人も、この構造のお世話になっているのである。

しかしこの頑固な構造にも限界があり、思わぬところで破綻をきたす。(だからカフカはやっぱり迫力があるのだが、)ほんの小さな黒眼鏡をかけただけで人が不安に陥ってしまうのも、たかが18時間ほど飛行機に乗って異国の町に立っただけで自分がこれまで生きて来た世界が影のうすいものとなってしまうのも、この破綻のためである。

そこで今、この構造という言葉を図号論的な立場から簡単に整理して「不安」の問題を考えてみよう。

よく知られるように記号論の立場から見ると社会は一つの共時の洪水であり、そこに存在するものは全て記号として処理される。ぼくたち人間の一人一人だって例外なく、意味作

用を發揮する、意味するもの (Signifiant) と意味されるもの (Signifié) の総体としての記号 (Signe) である。(Signe=Sa+Sé)

ただし一個の人間=記号を形づくる意味するものは無限であるから、意味するものは大切なもの (関与特徴=trait pertinent) とそうではないもの、とに分けられる。(たとえば大学の教師が茶色や灰色の背広を着ることは別に何も問題をおこさないが、真黒や真白の背広を着れば何か特別な意味の変化を引き起す。真黒なら、それは彼がこれからあらたまって葬式か結婚式に出席することを示すだろうし、真白なら彼が教師とは別口の収入があつて、教師を副業でやっていることを示すかもしれない。この場合、黒と白は大学教師の関与特徴の変化をきたすが、灰色や茶色はそうではない。)

だから特定の記号体系のなかでは、一つの記号の関与特徴が変化すると記号の意味作用はがらりと変ってしまうし、はなはだしい場合には記号として意味することをやめてしまう。

このように考えると、10年前ぼくは黒眼鏡をかけた時、思わずしらず (あるいは、なかば意識しながらも軽い気持ちで) 黒眼鏡といういわば負の関与特徴の働きによってぼくという記号 (=学生) の意味を一変してしまつたのである。そして意味を変えたぼくは、ちょうど誤つて用いられた言葉がすぐに言い換えられて捨てられてしまうように、正規の記号体系から脱落して一挙に無用のモノと化してしまつたのではあるまいか。

「黒眼鏡」をかけたぼくは、目の前の世界から突然ぬけ落ちて、文字どおりヨソの世界へ送られてしまつたのである。ぼくはその時初めて、不安と共に自己が一個の記号にすぎぬことに気がついた。「不安」とは、それゆえ、この記号のもつよるべなさであり、記号が記号としてある体系のなかで機能し続けているかぎり、それは表面に現れて来ない「はみ出した無用の記号」に特有の、いわば記号の頽落態である。

もちろん「黒眼鏡」をつけたぼくの不安は一時的なものであり、黒眼鏡という負の関与特徴をのぞけば、たちまちもとの記号体系に復歸して安心を得ることの出来る種類のものである。これと同じように、まっ白なパンタロンをはいて冒険をした教員も、反省して翌日から灰色の背広を着れば正業にもどることが可能である。

しかし外国を訪れた日本人のもつ不安はこれと少し違つた性質のものになるかもしれない。黒眼鏡や背広が簡単にとり変えがきいたのに、日本人であることはそう簡単にとり変えがきかないからである。

それに、そこには社会構造自体の完全な変換がある。眼鏡を変えてぼくという記号の意味が変れば、変えたぼくの責任だが、外国に出てぼくの意味が変れば、変つたのは少くともぼくではなく、記号体系の方である。だから日本にいるかぎり、ぼくの四角い渋紙色の顔は関与特徴ではないし、なにも特別なことを意床しないが、もしぼくがルーヴェンの町に立てば、ぼくの顔つきはぼくという記号について何か特別なこと (つまり日本人であること、または少なくとも東洋人であり外国人であること) を意味してしまう。そして日本人としてのぼくという記号は、ベルギー社会の記号体系のなかでは、トヨタの車やソニーのオーディオと同じ意味作用を持つことにもなる。これは、ぼくにとって、あまり気持ちのよいことではない。

そこでぼくは、この稀薄になつた存在感を充実させるために、懸命な努力をはじめます。

この新しい環境、新しい意味世界に同化するために自らの古い世界を解体し、その無効な部分を捨てて有効な骨組を生かし、新しい世界を学習する。また新しい世界の閉じた表面を壊し、構造内部への浸透を企る。

もちろん、その際こちら側に力があれば、世界の側を改変することも可能である。(はなはだしくは新大陸にのりこんだ植民者たちのように、相手の文化を破壊しつつすることもできる。)

だからこの空間移動にともなう記号の不安にはアクティブな契機がある。不安であることによって、自らと自らをとりまく世界というテキストをよりよく理解し、組織し直すことも出来る。しかし、そこにどれほどアクティブな側面があろうと、外国を初めて訪れた者は不安である。この不安は、黒メガネをかけて町を歩く若者の不安と別にかわりはない。つまり一片の記号にすぎないぼくが、体系からすべり落ちて機能(=意味作用)の障害をおこしているのだ。

だからこのよるべない記号のあり方をパスカル風に洒落て、「人間は自然のうちで最もつきなみな記号にすぎない。しかしそれは不安な記号である」と言うこともできよう。

だがさらに一言注釈を加えればこのへたなアフォリズムも後半だけに力点をかきすぎると、パスカルの場合と同様、文脈をすっかり読み違えることになる。

不安であることは大切だが、かといって、それはべつに人に自慢できるほどのことではない。たしかにそれはアクティブな契機であり、変革に不可欠な要素である。しかしこの不安は、一つの記号体系内でのぼくという記号のありきたりの機能障害からもやって来る。図式の前半部をよく読んでこのことを充分理解しておく必要があると思う。これが、三つの経験から得たぼくの第一の結論である。

さて、つぎに二つ目の結論に移る。これもじつは第一の結論と同じことであるが、前と少しレベルがちがう。

おそらくは島国であることと三百年の鎖国のせいで、明治以来の日本人は外国に出ることに異常な神経をつかい、異国の文化の受容に過敏ともいえる反応を示してきた。それは大きな視野で言えば日本の学問全体のありかたに関するものであるが、問題をよりかぎられた視点から考えると、この異常は外国を旅行したり、外国に住みついた日本人の紀行文や文化論のなかに集中的に表れているように見える。

彼らは見知らぬ町を訪れ、見知らぬ町に暮した際の不安や心の痛みを反省して、多くの美しく叙情的な文体をつくり上げた。彼らは、祖国を離れた根なし草のような傷をかかえて、自らの孤独な生を異国のどこに根づかせようかと心をくだいた。自国と他国との間にある空間的な超えがたい落差を埋めるために、時間の垂直軸をたどり、深い思索の糸を下した。(たとえば、かつてよく読まれた森有正のエッセイは、こうした反省の所産である。)

しかし今ぼく自身あまりかわりばえのしないルーヴアン生活をかえりみておもうと、これらの美しい文体も思索も、しよせん書齋の仕事であるように見えて、むなしい気がする。

それは、いくら「不安」について反省し、人の書いたものを読んでも、現実にはぼくたちの抱いている不安の解決にはならないからである。たしかに昼のあいだに西洋人と話をしうまく意を伝えられずに自己嫌悪におちいった時、夜一人で(出来れば書齋で)「日本」

と「西欧」の文化の相違に思いをいたすことはなぐさめになる。しかし昼になればまた不安はもどって来るのだ。誤解のないように言えば、ぼくはここで文化について反省しなぐさめをうることを無益であると言っているわけではない。それどころか良質の文学や哲学の効用の一つはこの「なぐさめ」にあると言えよう。しかしこのように反省の糸を時間にそって垂直におろすことは、少くとも昼の生活には役だたない。なぜならそこはすぐれて空間的な場であり、多くの問題が一瞬のうちに、いますぐ解決されなければならないからである。それはソシユールならば共時的と呼んだであらうような、今とここ (hic et nunc) に支配された意味連関の世界である。

ぼくたちはまたここで、ぼくたちが結局「一介の記号にすぎない」ということを思い出すべきなのであろうか。ぼくという記号は、一方でまぬがれがたく時の刻印を帯びてはいても、いずれ空間に投げ捨てられたものである。だからあまりすぎ去った時間のかなたに未練を残すと痛い目にあう。それにこの時間にしても、ぼくたちの期待をささえきるほどに強固なものでもない。だから日本人であるぼくが、わずか三年あまり日本を留守にただけですっかり日本にとまどうようなことが起るのだ。

ぼくたちが、少くとも夜の慰めや芸術をよそにして昼の生活を営むかぎり、あまり日本であるとか西欧であるとかにこだわらぬ方がよい。これがぼくの第二の結論である。

「時間軸の思索をおしのけて、爆発的に広がる同時代の共時的空間」があり、そこにさまざまな異空間が並存する。この構造間を「不安」なく旅することもまた大切である。

そのためには不安な魂が夜の闇に息づいているような書齋と文化人の文明論の時代は早く終わった方がよい。その場かぎりの即席会話本やカタログ、トポグラフィックな地図が彼等の夜の反省より軽視されてよいはずはない。選ばれた実存の深く沈んだ思索のしじまを破って俗物たち（ノーキョーやギャルやオーエルたち）の行動の時代が始まったのだ。

いささか短絡気味ではあるが、これもまた実存主義の終焉と構造主義の台頭のひとつのきざしであると言えるのではあるまいか。

II

さて I の部分をなんとなく私的な経験を反省することから始めたので、II以降もこの「私性」にこだわって論をすすめてゆくことにする。

ぼくの住んでいたルーヴァンという町はブリュッセルから 30 キロほど東にある、半径 1 キロ足らずの円形の町で、中央に大学とほぼ同時代（それは 15 世紀初頭のことだが）にたてられた後期ゴシックの市庁舎と教会と広場があり、広場からそれぞれの隣町に通じる 6 つの街道が放射状にのびている。町のまわりにはかつて城壁があつたらしく、町はずれには、例えばブリュッセル門、ナムユール門という風に、隣町にむかう門がある。そして城壁のかわりに今町を環状にとり囲んでいるのは自動車道路であり、ぼくが住むようになって一年ほどしてブラッセルにむかうハイウェイのインターチェンジもできた。

この小さな円形の町のなかに大学は散在している。スーパー・マーケットのすぐ前に大学食堂があり、むかしの市場あとに面して大学の事務局がある。町はずれに大学の病院が二つ、哲学研究所のまへはカフェで、横は一つおいてパン屋、教員の研究室のすじ向いが八百屋であったりする。

町全体の人口は6万人位だが、学生はおそらくその半数くらいだろう。学生たちはほぼ全員が町に下宿している。

町のはずれには大学と同じくらい重要なステラ・アルトワというビール会社があって（この会社の創設も大学と同じだが、その後成長を重ねなんと世界一のアンハイザー・ブッシュ・インベグに変身してしまった）、そこで働く人も少なくない。しかし町の人たちは、たいがい（下宿屋も含めて）学生相手の商売をして暮していると言ってよいだろう。

ここでぼくがこのルーヴァンという町を素材に考えてみたいのは町の機能と町の歴史、そしてその焦点にある町の構造の問題である。

およそ町は町であるかぎり、その歴史をもっている。また町には町として果すべき機能があり、その機能は入り組んで細分化され、歴史と共に変遷する。

町の構造は一義的にはその機能が決定すべきものだろうが、実際にはいつも歴史がそこに介入して来る。だから例えばルーヴァンは機能としては大学都市なのだが、何よりもまず「歴史的な」大学都市なのである。そしてこの歴史はゴーストタウンのそれのように機能の停止と共に死んでしまった歴史ではなく、今もまだ生きられている歴史である。

ルーヴァンの町の歴史を詳しくたどったことはないが、この半径1キロの小さな町は、メルカトールやエラスムスの時代からあまり構造を変えてはいないと思われる。



町の中心の市庁舎や教会は言うにおよばず（市庁舎は今も事務棟として使われている）、ジャンセニウスが教鞭をとっていた校舎もそのまま法学部の授業に使われているし、彼と争ったイエズス会のバロック式の教会も残されている。

もちろん時代とともに学問の中心も変り、いくつもの新学部が増設されて、ルーヴァンの町も手ぜまになり大学の発展についてゆけなくなった。理工学部が町の外に移転し、スポーツコートや学生寮も環状線の外の森のなかにある。しかしそれもすべて徒歩か自転車でまにあう距離にあり、町の一つの延長として機能している。そしてそのために町全体の姿が破壊され尽くすこともない。ゆるやかに蛇行する街道や、行き止まりの路地はすっかり昔のままだろう。

しかしこの外側の姿をかえぬ町を、機能という視角で内側から見れば、そこには著しい変化が見られる。かつての僧院ベギナージュは、美しく残されてはいるが、今は学生たちの寮である。古い市場の跡は、時に朝市でにぎわいはしても普段は駐車場だ。町には辻ごとにカフェとレストラン、それに映画館が6つあるが、これもそれほど昔からあったわけではない。古い家は思い出したように倒されて。アパートに変わってゆくが、新旧交代の象徴的な姿は教会であろう。ぼくが初めてこの町を訪れた夏、ルーヴァンには実に20以上の教会があった。半径1キロの町に20という過剰のように聞えるが、この町がローマと並ぶ神学の中心地であれば当然のことかもしれない。

しかしその教会も、ぼくの滞在中にひとつ、またひとつと姿を消し、駐車場やアパートに姿を変えた。それまで大きなステンドグラスと尖塔のそびえていた場所が、のっぺらぼうの空地となり車が並んでいる光景はいかにも無残である。ルーヴァンの町はおそらく今、歴史始まって以来の規模で機能の変革を求められ、そのために過去の絆を思いきって絶ちきっている最中なのかも知れない。



しかしこの町がその急激な機能の変革にもかかわらず、その根本で昔のたたずまいを保ち続けていることは、今日の日本から見ると驚異としか言いようがない。石とレンガ造りの町の構造を出来るかぎり忠実に保ちながら、現在の生活の要求に答える。都市の記号学というロラン・バルト風の用語で言うならば、意味するもの（＝町の構造）を変えずに意味されるもの（町の機能）をすっかり変えてしまうという奇蹟がそこにある。そしてぼくがここでルーヴァンという小さな町についていささかノスタルジーをこめて語ったことは、ヨーロッパの多くの町についても言えるのではあるまいか。

ぼくの知っているベルギーの町は、ブリュージュもブリュッセルもマリーヌも、アントワープですらルーヴァンの場合によく似ている。同じことはいくらかの変化を伴ってフランスについてもイギリスについても言えるだろう。

平野や谷間に小さな核となる町があって、そのまわりに森や畑が広がっている。町と町の間には街道があり街道ぞいのところどころに村がある。日本の町のように東京から大阪まで切れ目のないメガロポリスなどという無定型なものはない。

ヨーロッパの建築家や都市学者たちが東京を見るとまったくあきれてしまう人もいるが、なかには素直に感動してしまう人もいるらしい。たとえば、さきほど述べたバルトのような記号学者にとっては、東京はレイモン・クノーの「百億の詩」にも比せられる発見に満ちたテキストである。たしかに新宿の町は見た目にはみにくい、町のなかを移動する者（町の使用者＝読者）にとっては無限に聞かれた一冊のテキストである。読者はこのテキストを自由に、自分の好みにしたって読むことができる。

たとえばある一人の主婦にとっては新宿は買物の町である。彼女は自分のために小田急と京王と三越と伊勢丹を結ぶかなり複雑な迷路の地図をもっている。彼女にとってはこの地図に記された路は役に立ち、安全であるが、一步そこから外れることは危険だ。

また他のある学生にとって新宿は一つのアジトである。彼もやはり自分のための地図（ジャズ喫茶やバーや本屋や映画館をむすぶ地図）をもっていて、しかも日中はめったにこの地図を使用しない。彼には日中が危険なのだ。そしてこの町を自らの地図にしたがって歩く者は、自らの固有の意味をこの町に見い出してゆく。もちろん、なにも東京にかぎらず、パリもロンドンもこうした個人的な秘密に満ちた町である。だからこそジキル博士とハイドが生まれ、三文オペラやルパンが信仰されるのだ。誰もがあのオーソン・ウェルズのように地下道を使って焼け跡のウィーンを支配したいと願っている。そしてバルトのような旅行者にとっては新宿は戦後30年たっても焼け跡の生きている町である。

しかし都市には都市を支配する論理がある。新宿は30年間、これを「焼け跡」と呼ぶなら「焼け跡」の論理を生きてきた。記号学はこの論理を読みとることが仕事である。しかしこの論理は、バルトのように日本の町をほんの一瞥した者には見えるはずがない。この町の利用者の一人一人、もっと正確に言えばこの町に「利用されている者」の一人ひとりが読みとらねばならない論理が、そこにはある。

新宿はまずそこを通過する者、毎日新宿を通って会社まで片道二時間かけて通う者、私鉄の雑踏のなかで棒になってしまった者たちの町である。この町を使用する者が、ほとんど誰一人としてそこに住んでいないことは注目に値する。この町を支配する最も強力な論理は私的所有の論理だ。あまりにも高価で人の住みつくことを許さないこの町を一寸きざみに買いとった資本は、最大限にその土地を利用する。所有者の一人一人が自己主張して他との妥協を考えない。ただひたすらに資本の自己増殖を考えて、町の通過者の欲望をかき立てる、がん細胞並みの町である。

バルトがこの町にエロスを感じるのは勝手である。（ロラン・バルト「記号学と都市の理論」 in 「現代思想」75年10月号、青土社）彼はおそらくミハイル・バフチンのラブレール論あたりを下敷にして、中世の市場の待つ祝祭空間と新宿の町の喧噪とを重ね合わせて解釈を行っているのだ。中世の市場は日常的な世俗権力のヒエラルキーを否定した「聞かれた世界」として、人間と人間、物と物の「自由な接触」をもたらし、閑ざされた日常生活に流動と変貌をもたらした。（この点については山口昌男著「道化の民俗学」新潮社刊の第二章の五参照。）

しかし今日、新宿の町を流れる群衆になんのエロスを期待できるのか。バルトがこの場合エロスの二つの次元として、他人との出会いと物の交換をあげているのは象徴的である。果して新宿の町に人間の出会いはあるのか。この流れてゆく群衆のなかに出会いを語るの

はナンセンスだ。もちろんそこにも多少の接触、喫茶店での待ち合わせくらいはある。しかしこの出会いはあくまで通過地点としてこの町が便利に利用されているかぎりのものであって、この町で新しく人を発見することは稀だ。狭くてうす暗い喫茶店や、軒をならべるラブホテル象徴されるように、この町は本来人間のものであるべきエロスをなんと薄っぺらな醜いものにしてくれたことだろう。

バルトが第二の点としてあげている物と物との交換、つまり買物にいたっては問題外である。なるほど新宿の中心がデパートやブティックにあることは確かだが、デパートで買物を楽しむ階級がどれほど真の創造（＝エロス）から疎外されているかは、いまさらいうまでもあるまい。女中が食べすぎて太るように、主婦は買物に浮き身をやつす。物を買うことが、現在では生活の必要を満す以上にフラストレーションの解消に役立っている。これはどうみてもエロスと呼ぶよりはタナトスと呼ぶほうがよい。新宿は、人と物との相互の接触において開かれていると言うより、むしろ閉ざされた町である。

だからぼくはこの町がはっきり美しくないと言いたい。それはこの町が一度として住む者の論理で考えられたことがないからである。焼け跡の上に私的所有と孤独な欲望だけが反エロスの単性の分裂を繰り返している。これを意味するもの（Sa）の意味されるもの（Sé）から解放された広がりを見るのはバルトの自由である。しかに人間にあらわれて来る現象のなかに意味のないものなどあるだろうか。

意味するものと意味されるものとの関係を一枚の紙の裏表にたとえて、意味するものを切れば意味されるものが切れ、意味されるものを切れば意味するものが切れると言ったのはソシュールであった。そしてさらに現象の世界のあらわれの原初的メカニズムを説明するノエシス＝ノエマの関係をみても、ノエマはすでに意味であった。そしてもし一歩ゆずって意味されるものがない意味するものがあると仮定しても、それはちょうどあのマロニエの根のように我々の嘔吐をさそうものではないのか。新宿の醜くさは、まさにこれである。

町はそれではどのようにしてエロスの次元を回復したらよいのか。それは町をつくるにあたって、町を通過する者の論理より町に住む者の論理を優先させることである。そこに人が暮すことが出来てはじめて町なのだ。住む者の尺度にしたがって町がつくられれば、町の通過者はきっと不自由な思いをさせられるだろう。町にはある秩序が生まれ、町の完全に自由なテキスト性は失われて、住む人々のコード（共同性のコード、コミュニヌのコード）が優先される。町の通過者の数は必然的に減少する。町が不便になるのだ。そしてぼくはそれでよいと思う。新宿のような人の住まない真空の焦点めざして、みなが二時間かけて通うのは異常である。

町は一つの生きた活動体であり生命である。そこに住む人と通り過ぎる人との要求にしたがって変身しなければならない。昨日まである広場を支配していた意味が今日は消えて、新しい建物が建ったり公園になったりするかもしれない。歴史は町をつくるが、機能もまた町をつくる。歴史的な意味づけは、日々消滅の危機にあるのだろう。

しかし我々が始めにルーヴァンの町を例に見たように、石造りのヨーロッパの町々がその歴史的構造をとどめたまま、現在の要求する機能を満たそうと努力するのにはわけがあると思う。それはまず住む者が自分の町の歴史を愛しているからであり、自分の住む町をあまり動かずに生活の糧をみいだそうと努めるからである。

町というある一定のスペースに住むことのできる人間には限りがあり、人間の必要とする空間はそう急激には変化しない。だから昔の人が大切にした暮らしを今も守ろうとする。町が美しいのは、ある年月が決めた暮らしのかたちがそこにあるからである。

日本のメガロポリスとその真空の中心（東京）にはそれがない。だからいたるところ、醜悪な姿しか見い出せないのだ。

（この小論は、かつて1977年3月「現文研」46号に書き下ろした編集後記「後記に換えて——きわめて私的な空間体験から——」に加筆したものです。）